

「英粵対音資料」と二三の歐化前史現象

平成 29 年 4 月 24 日受付

矢 放 昭 文*

要 旨

小稿では「英粵対音資料」が内包する「歐化語法」の「予兆現象」について検討する。研究対象とする「英粵対音資料」の大半は 19 世紀中葉に成立したものであるが、その中に、書面粵語の繫詞（判断動詞）“係 hai⁶”と存在場所を示す動詞或いは前置詞“喺 hai²”の間の、声調変化を伴う「文法化」現象（文法上の発展）を認めることができる。この点は、1910 年代に始まる歐化語法発生の「予兆現象」或いは「歐化前史現象」の一つとも見做すことができる。

またアヘン戦争（1840-41）後、英国との商業交易が著しく発展したことに伴い、多くの借用語が粵語語彙に取り入れられた事例、西洋のラテン文字に比して本来的に語音表記機能が限定される漢字を使つての英語の強弱アクセントと語音表示に施された詳細な工夫など、口語を主体としつつ、さらに英語音の微細な表記にこだわる注記を「狩野本」の『華英通語』（1855）に認めることができる。

これらの事実は、交易の現場における口頭交渉の必要上生み出されたものであろう。口頭コミュニケーションの重要性と必要性は、話し言葉を書面で記録し保存する英粵語彙集・会話書の誕生と、白話文体による書面粵語の発達を促した。さらには 1910 年代の「歐化語法」発生を導く予兆現象と考えることも可能である。

キーワード：英粵対音，歐化語法，声調変化，書面粵語，歐化前史現象

1. 序言

1.1. 「英粵対音資料」

小稿でいう「英粵対音資料」とは、19 世紀中葉以降、当時の広東を拠点としてイギリスなど西洋諸国との商業取引に従事した華人（中国人）が編集刊行した英語学習のための冊子、参考書を指す。数量の数え方、商業用語、交易商品、基本的な挨拶文などの英語表現を学習し、運用することを念頭において編集されており、実用的な英語学習書とも言うことができる。収録された英単語・短文については、個々に漢語で意味を示すとともに、漢字音を利用して英語音を標記している。その際の漢字音は標準中国語としての官話音ではなく、粵語音と見做すことの出来る方言音である。粵語音にもとづき英語音を音訳しているが故に「英粵対音資料」^①と呼んでいる。

今日見ることのできる資料には書写本、木板刷本、活字印刷本があり、書写本には大英図書館所蔵

* 京都産業大学外国語学部

の Or.10886, Or.7428, Or.7415 などを挙げるができる。いずれも刊行年代を具体的に定めることは出来ないが、大英図書館の考証にもとづけば 1830～50 年代に書写されたものと推定されている。

木板刷本には、原初形態に近いものと推定できる『紅毛通用雑話』が 5 種類確認されており、大英図書館に「璧經堂本」, 「成徳堂本」, パリ国家図書館には「榮徳堂本」, 「富桂堂本」が、台北傅斯年図書館には「以文堂本」が所蔵されている^②。『紅毛通用雑話』類についても、その具体的成立年代をはっきりさせることには困難が伴うが、大英図書館の判断にもとづけば、書写本と同様に 1830 年代～50 年代の成立と考えられている。

次に重要な「英粵対音資料」は『華英通語』である。東北大学狩野文庫には咸豊乙卯年（1855）刊、上・下合冊本が所蔵されている。（以下「狩野本」とする）。またロンドンの V&A Library には同書の上冊のみが所蔵されている。「V&A Library 本」は「狩野本」と同一の板下により刷ったものである。また福澤諭吉が万延元年（1860）に咸臨丸に同乗した際、サンフランシスコで購入し、帰朝後江戸で板を起こして刊行した『増訂華英通語』（「福澤本」）の藍本は「狩野本」と同一またはこれに極めて近いものであったと、推断できる^③。

「狩野本」と同じ板下を使いながらも、収録各語彙の音訳標記については「狩野本」とは異なる審音基準にもとづき用字を改めると同時に、語彙の排列をも改めた「哈佛本」がハーバード大学燕京図書館に所蔵されている。清朝の咸豊庚申（1860）年、即ち福澤がサンフランシスコで藍本を購入した万延元年に「恒茂蔵板」として西營盤（香港）で印行されたものであり、福澤が購入した藍本とは異なるものである^④。

最後に『英語集全』（全 6 巻）について述べておきたい。『英語集全』は清末、特に 19 世紀後半の廣東で「洋務運動」に参画すると同時に、代表的な「買弁」として知られている唐廷樞（1832-1892）が咸豊任戌年（1862）年に広州で「緯經堂板」として出版した英語教科書である。研究書としては Geoff P. Smith & Stephen Matthews (2005)^⑤、論文としては鄒振環（2008）^⑥などがある。また筆者による同書の音註方法、収録の英単語・短文についての音訳字の特徴に関する若干の報告もある^⑦。但し「歐化前史」という側面からの論点についてはいまだ報告は行われていない。洋務運動時期は西洋の情報、技術や商品が急増した時期とも言われており^⑧、西洋印刷術も導入され始めていた。印刷技術の変化は、書写本から木板版、活字版へと、書版の形態が著しく変化した経緯を具体的に示しており、木板本の『英語集全』はこの点でも貴重な価値を有している。小稿で利用する「英粵対音資料」は以上の木板印刷された線装本の小冊子或いは書籍を指している^⑨。

【註】

- ① 黄耀堃（2001）, 《唐字調音英語》與二十世紀初香港粵語的聲調, 《方言》第三期, 中國社會科學語言研究所, pp.281-285.
- ② 5 種類の『紅毛通用雑話』については鄒振環著、韓一瑾・川端歩訳「19 世紀初期広州のビジネス英語読本の編纂とその影響」, 内田慶市・沈国威編著『言語接触とビジン』所収（白帝社（2008）, pp.165-178.）に詳し

い記述がある。

- ③ 矢放昭文 (2015) 「福澤論吉と『増訂華英通語』」『京都産業大学日本文化研究所紀要』第 20 号, pp.231 (64)-209 (86).
- ④ 「哈佛本」の画像は近年ハーバード大学燕京図書館のウェブサイトに公開され研究に供されている：
<http://ctext.org/library.pl?if=en&file=144441&page=19>
- ⑤ Geoff P.Smith & Stephen Matthews (2005) “Chinese Pidgin English: Texts and Contexts”『十九世紀廣東番話：原文及背景』The English Centre, The University of Hong Kong.
- ⑥ 鄒振環 (2008) (上掲書) も詳しく述べている。pp.172-177.
- ⑦ 矢放昭文 (2009) 「唐廷樞《英語集全》的兩種語音標記」《粵語跨學科研究：第十三屆國際粵方言研討會論文集》香港城市大學語言資訊科學研究中心編, pp.271-286.
- ⑧ 手代木有見 (2013) 『清末中国の西洋体験と文明観』汲古書院, pp.18-21.
- ⑨ テキストとしては京都大学人文科学研究所蔵本がウェブサイト上に公開されており研究に利用することができる。<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/A021menu.html> 『英語集全』発行は 1862 年の 1 回だけであったと思われる。だがロンドン大学 SOAS 図書館所蔵本と京都大学人文科学研究所蔵本の間には、巻二〜六の冒頭部に収録する音訳字についての“反切”型式の音註箇所にも異同を認めることができる。この点については別途の報告を準備中である。

1.2. 「歐化」

「歐化前史現象」について述べる前に「歐化語法」について触れておきたい。漢語、つまり標準書面中国語の「歐化語法」をはじめて指摘したのは、知る限りでは、王力 (1900-1986) である。王力 (1943)^{①②}は「歐化」を「西洋文化の影響をうけて生まれた中国語の新しい語法」と定義している。王力が漢語の「歐化語法」現象を捉えはじめたのはおそらく 1920 年代前後ではなかったかと筆者は推測する。王力が生まれた 1900 年はいまだ清朝光緒帝の庚子 (26) 年であった。幼少時期の王力にとり、言語習得時期の識字教材は、当然ながら一般的な読書人子弟と同様『三字経』『千字文』『唐詩三百首』などであり、また『大学』『中庸』など「四書」経典でもあったと思われる。王力より 8 年早い光緒 18 年 (1892) に生まれた趙元任 (1892-1982) は 6 歳時に「四書」特に『孟子』を好んで読み始めている^③。

青年期の王力にとっても、書記言語修得を目的とする識字教育教材として伝統的文言文から離れることは難しかったのではないだろうか。だからこそ、1920 年代に通行し始めた徐志摩 (1897-1931) の文体に「歐化語法」現象を把握することが出来たのであろう^④。ごく自然のことであったと思われる。言い換えれば、王力の指摘した「欧化語法」は、基準を立てて用例を絞り、さらに統計を取るなどの実証検証が行われたものではなく、どこまでもその言語感覚に基づくものであったと推定できる。

漢語の実質上の「欧化」は、20 世紀初頭、1910 年代に起こった五四文学運動の時期に、白話書面文体の担い手として先駆的活動を行っていた徐志摩をはじめ、ロンドンに 5 年滞在し C. ディキンズ作品を愛読したと言われる老舍 (1899-1966)^⑤や傅斯年 (1896-1950)、梁実秋 (1903-1987)、謝冰心 (1900-1999) 等の文学文体に顕著に表れはじめた。英語を中心とする西洋語法の知識は、英語学習に高度の努力を注いだこれらの作家達の文学言語に、おそらく無意識に盛り込まれ、多くの読者層

へ書記習慣として拡散して行ったのであろう。従って「歐化現象」研究は、関光世（2015）が指摘するとおり、白話書記言語の文体に「定着」の様相を確認してはじめてその説得力を持つことも言を俟たない。

【註】

- ① 王力（1943）『中国現代語法』商務印書館，1985年版。
- ② 王力（1944）『中国語法理論』中華書局（全二冊）1955年版。
- ③ 趙元任（1984）『早年自傳』傳記文學出版社，（1997）『从家乡到美国，赵元任早年回忆』学林出版社。
- ④ 関光世（2015）「徐志摩の翻訳作品に見られる欧化現象について」『京都産業大学論集』pp.157-177.
- ⑤ 呉格非（2010）「老舍在伦敦及其与英国文学的关系」『1848-1949 中英文学关系史』中国矿业大学出版社，pp.228-245.

1.3. 「歐化前史現象」

一方の「歐化前史現象」とは、書記言語としての漢語の「歐化語法」が表れる迄の時代の文学言語などの書面資料が記す形態的特徴の中に「歐化の予兆」として見做すことのできる現象をさす。また小稿での「歐化前史」時期は19世紀中葉～末までを指している。阿片戦争（1839～1841）後より始まったとされる中国近代の歴史は、書記言語が近代的展開を見せる時期とも重なるが、伝統的文言文の拘束力は、清朝の科挙制度が1910年まで持続したために、人々の予想を超えて強固な力を発揮していた。従って、華人（中国人）による書記言語としての白話口語文体の実現は、五四文学運動時期まで待たなければならなかったのである^①。

だが、五四文学運動時期より約80年前の19世紀前半、特に阿片戦争後に西洋諸国との商業交易上より英語を学ぶ必要が生じた人々の間で編纂された英語の参考書、語彙集、短文集、つまり「英粵対音資料」の文体には、明らかに西洋の文物が中国と異なる点を注記するものがある。その中には語彙面での理解にも注意が必要な点、さらには英語知識が華語と異なることを記述する点、或いは白話文体としての英語文体の模倣による特色をピジン英語として捉えた研究が行われている^②。このような英語知識がもたらした語彙上、文物交流上、文体上の特色について「歐化の予兆」あるいは「歐化前史」現象として「英粵対音資料」に見出すことのできるいくつかの特徴を以下に述べてみたい。

【註】

- ① 王力（1981）『中国言語学史』山西人民出版社，pp.173-208。「西学东渐的时期」。
- ② Geoff P.Smith & Stephen Matthews（2005）上掲書。

2. 『紅毛通用雑話』

阿片戦争前後の広東の言語状況について、西洋人宣教師が記述した重要な文献の一つに“*Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect*”^①を挙げる事が出来る。S.W.Williams（1812-1884）がElijah

Coleman Bridgman (1801-1861) を手伝い 1841 年に広州で刊行された同書には『紅毛買賣通用鬼話』が通行していた記載を見出すことができる。この書名はパリ図書館所蔵の「榮徳堂本」と同一である。Williams が記録した板本を直接見ることは出来ないが、偶然の一致というだけでは止まらない情報であるにちがいない。

K.BOLTON (2003)^②の分析によれば、「璧經堂本」収録の 372 條の語彙の大部分は英語起原であるが、さらにポルトガル語、スウェーデン語、マレー語起原もあることが明らかにされている。この点を解釈するには、「広東十三行」の歴史を、少なくとも 17-18 世まで振り返る必要があるだろう。

広州に粵海関が設置され西洋諸国との交易が許されたのは康熙帝 (1661-1722) の 24 年 (1685) のことであった。翌年「広東十三行」が指定を受けると、粵海関の監視下を条件として、西洋諸国との貿易独占が許可されていた時代が 19 世紀前半に到るまで続いていた。だが 19 世紀前半、特に阿片戦争 (1839-41) の終結と南京条約締結以降、「広東十三行」による独占は廃止されるに至った。独占は廃止されたものの「広東十三行」の交易上の力に根強いものがあつたことは多方面から確認できるのであるが、それでも条約締結が、大衆とも言うべき相当数の「買弁」と呼ばれる華人達が商業交易上の必要から英語を学び始める契機ともなったのである^③。

17～18 世紀の公行時代の記録については、例えば Paul A.Van Dyke (2011) の研究^④が記載する VOC (Dutch East India Company) と「十三行」間の取引文書には「噴囑國 (Holland)」「唵公班牙 (Lian company)」などの国名、会社名の音訳語を見つけることが出来る。Holland の /Ho/ に対する「賀」字、/land/ 対する「蘭」にそれぞれ口偏を加えることにより、通常の子音とは異なることを示したものであろう。

しかしながら中国側の取引締結に関する文書はすべて文言文で記されており、上記のような音訳国名、会社名は例外的である。また Paul A.Van Dyke (2011) の研究には 1752, 1762～76 年間に十三行の一「Tan Suqua」に出入りした SOIC (Swedish East India Company) の Supercargoes (上級乗組員) 記録が報告されている^⑤。K.BOLTON (2003) が報告する「璧經堂本」『紅毛通用雜話』収録のスウェーデン語彙の淵源を考察するには、別の課題として、18 世紀中葉に活動した SOIC (Swedish East India Company) の従事者の活動まで視野に入れて資料を調査することが、研究の深化には、おそらく、有効であろう。

【註】

- ① “*Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect*” https://archive.org/details/chinesechrestoma00brid_1
- ② K.BOLTON (2003) “Chinese Englishes, A Sociolinguistic History,” Cambridge University Press. The archaeology of ‘Chinese Englishes’ 1637-1949, pp.152-172.
- ③ 19 世紀後半、廣東の沿岸一帯の各層で英語学習が行われていたこと、またその内容については高田時雄 (2009) 「清末の英語学」『東方学』第 147 輯, pp.1-19. に詳述されている。
- ④ Paul A.Van Dyke (2011) “Marchants of Canton and Macao” published jointly by Hong Kong University Press and Kyoto University Press.

⑤ Paul A. Van Dyke (2011), pp.308-309.

3. 『華英通語』

「狩野本」は、「福澤本」とは異なり、掲載英語語彙に「漢語注釈」を付している場合が多い^①。下記の記述は「福澤本」では削除されている代表的な事例である。

例えば冒頭の「heaven：天體」については；

“The body of the heavens is apparently spherical like a globe &c, Its breadth is immeasurable. 天體渾圓若球其廣莫則測也。”（頁五右）

また次に掲載する語彙「surface of the earth：地乃園」については；

“The surface of the earth consists of land and water. Only a little more than one quarter is land. 其面分水與土，為土者得全面四份之一，有奇其餘則皆為水”（頁七右）

の如くに注釈を施している。「狩野本」全体を通じて「漢語注釈」を確認出来る語彙は以下のとおりである。

頁数	漢語	英語語彙	音訳語	漢語注釈
29 左	告白	Declaration	尼 忌心臣	告白即告示
〃	賄	Bribe	嘛礼喋	即食同也
37 右	袍	Robe	兎合笠	此句則當貫連耳說之
〃	千里馬	Courier's sandal	加兎合心 了士 山尼兎	即皮鞋
40 右				顔色之目指，不勝屈，倘有不識其名者，遂將五色名加以
52 左	大絨	Breadcloth	嘛 兎合啤 嚙罗士	士字以二齒合舌尖然後說之 ^②
55 左	磁石	Loadstone	啤士 頓	即漢人所稱攝石也
56 右	蔻豆	Nutmeg	嫩 覓	又名曰白玉菜豆是也
56 左	舊公	Patna	叭嗶	即白公烟是也
58 左	線	Thread	士倪結	此結字繩結之結也（右，縦）士字以二齒合舌尖（左，縦） ^③

59 右	口鐵	Tin plate	顛 啤結	馬照繩結之結而說之是也
59 左	金	Metal	乜 嗲倪	此乃五金之總名也
64 左	酒	Spirits	時卑 兇合列 時	此句乃酒之總名也
〃	罷蘭地	Brandy	嘛 兇合蘭 尼	即漢人名為雙蒸是也
66 左	梟	Owl	珂 倪	即貌頭鷹
89 左	桔槔	Wellsweep	噉倪時 威合噉	用以汲水
100 右	琵琶菓	Loquat	罗 橘	即蘆橘是也
110 左	竹筏	Raft	倪 拉合父 地	即今之竹排也
116 左	墨升	Ink-cup	鷹急	諸乃印書之用
〃	車，釧動	Level, lathe	叱花，叱士	用以車圓之器
117 右	糊盤	Paste-bowl	啤時摩倪	諸乃印書之器
127 右	出口	Export	噉時 砵	出口者乃出口之貨物也
〃	入口	Import	噉 砵	入口者乃入口之貨物也
〃	壟斷	Forestalling	科 時哆玲	壟斷者使用之謂也
〃	水腳	Freight	父 兇合噉	照繩結之結是也
127 左	牌號	License	叻 先 時	即請驗方行之紙曰牌
128 左	限銀	Demurrage	尼 孖倪合心 治	即過限另加之銀也
〃	賠還	Drawback	尼倪合罗 () ^④ 忌	即貨未帶携回故曰賠還稅
129 左	水人	Seaman	施 巒	即水手是也
133 右	倒行	Failure	啡倪 揸	即敗盤
137 右	失敬	I beg your pardon	挨 覓天丫 巴吶	「諺曰唔該是也」

【註】

- ① 矢放昭文 (2015) 上掲論文。
- ②③ はそれぞれ Breadcloth, Thread の /-th/|θ/ 音を「士字以二齒合舌尖」と注記しており、少なくとも調音方法を記述することで粵語音に存在しない語音であることを示している。
- ④ 「福澤本」(76 左) が「尼 倪合罗 忌」と音訳するのに対して、「哈佛本」(128 左) は「特罗白忌」と音訳しており、「狩野本」が Back の /b/ に相当する音訳字を欠いていることは明らかである。おそらく板下の段階で脱落しており印字されなかったものと思われる。「福澤本」も同様の処置をしている。ということは「福澤本」は Back の /b/ 子音に対応する音訳字が必要であることを認識していなかった、と言える。つまり音訳字として使われている漢字音が広東語音であることも、当然ながら福澤は認識していなかったことの一部を示している、と言えるだろう。

3.1. 『華英通語』が記す人称代名詞の漢語解釋

「頁 119～125」には「狩野本」編者の人称代名詞についての解説を見出すことが出来る。一人称詞について漢語（意訳）では「我」であるが、音訳には主格の「I：挨」と目的格の「me：味」をそれぞれに対応させて記載している、二人称詞についても同様であり、意訳は「You：你」主格「You：天」目的格「thou：兜」、三人称詞については、女性は「She：佢」「her：虾」、男性については「He：他」「him：謙」を記している。

二人称詞の目的格に「thou」を用いる例はラテン語由来の可能性が高い。また J.BANYAN (1628-1688) “THE PILGRIM'S PROGRESS” は『天路歷程』として 1850 年代に文言文体で漢訳されているが、その英語原文には「thou」が用いられている。その訳語法が援用されたと考えてもさほどの差し支えにはならないと推定している。但しこの問題については別途に考察をまとめた。

三人称の男女別について「狩野本」は「他」「佢」を使い分けており、「佢」については「以女人而説之」と注釈を加えているが、現代の書面粵語では男女区別なく、ともに「佢」を使用する。「狩野本」のこの処置は、男性詞については未だ文言文から脱却できない思想に基づいた処置である、と筆者は解釋している。

119 右	我	I 又曰 me	挨 味	
〃	你	You 又曰 thou	天 兜	
〃	他	He 又曰 him	希 謙	
〃	佢	She 又曰 her	施 虾	以女人而説之
125 左	你嘅	Thine or thy	坭烟 或曰 坭	
〃	佢嘅	His or hers	希時 或曰 虾時	此二字迥異，照男講則希時，照女説則虾時

3.2. 「狩野本」が記す前置詞「喺」と「在」

現代書面粵語では存在を示す動詞，または場所を示す前置詞として一般に「喺 hai²」を使用する。この点については中国語方言についての近年の言語地理学面からの成果である『漢語方言地圖集・語法卷』^①にも報告がなされている。同書の「035 (他在家)」「036 (在城裡工作)」「037 (他坐在椅子上)」文例の報告資料には「俗字的“喺”，與“是”義的“係”，聲調不同（俗字的「喺」は「是」の意味の「係」と声調が異なる）」と注記しており，さらに地図上から判断すると，その通行地域は香港，広州などに限定されている。“喺・・・(場所)”の通行地域は極めて限られているのである。このことは，その淵源がさらに限られていることを示している。

成立が約 160 年前である「狩野本」が下記に示す「喺啲處」「喺邊處」「喺船處」等の「喺 hai²」の用例は，それぞれ直接には“there” “In whose employ” “Where” “in the ships”などの「場所」に対応しており「(某場所)～に存在する」「(某場所)～に(ある)」という意味を示している。

154 左	你重喺個處住嗎	Do you live there still ?	奴 天 忖父 尼 時响倪
156 右	你喺邊處打工呢	In whose employ are you ?	咽 嘸時 嘸罷來丫天
156 左	甚少喺船處做工	I work in the ships very seldom.	挨 嘍 烟 呢 陟時 威忖 些倪 噏
165 左	我喺邊處睇得着佢呢	Where shall I find him ?	噉丫 沙倪 挨 輝烟 謙

王力 (1937)^②によれば、漢語史における繫詞としての「係」字使用例の最初は1176年刊の『近思録』に見られる。王力 (1937) はさらに「現代粵語 (一部分) 與客家話都用“係”字來代替“是”字: 粵語唸 [hei] 客話唸 [hɛ]。就書而論, 我們雖則可以把它認為宋代才有的; 就實際的語言事實而論, 我們應該承認它的來源是很遠的。因為粵人與客家很早就離開了中原, 我們不能想像宋代以後產生的繫詞會流傳到閩粵, 並且只能保存在閩粵人的口語裏…」^③と述べ、実際の使用はさらに遡ることを示唆している。王力 (1937) の説によれば、一部の粵語と客家語の繫詞は、口頭語では「係」が千年以上使われて来たとして理解することもできる。

従って「狩野本」が示す書面粵語「喺」の用例の出現は、筆者の考察するところ、粵語繫詞 (判断動詞) として一般的な「係 hai^④」に文法上の品詞変化が加わり、「(某場所) ~に存在する」「(某場所) ~に (ある)」という存在を示す動詞化、前置詞化とともに形態的に「変調」が加わった結果であり、「口」字偏はその「変調」を示す目印である^④。

一方で「狩野本」には文言文に由来する「在」を書記言語として示している例も見出すことが出来る。

150 右	你在邊處得錢做	Where do you get for doing this.	噉 奴 天 啞 科 奴鷹 呢時
〃	佢曾放之在此	He has put it in.	希 虾時 不 咁 烟
153 右	三隻鑿泊在此	Three store-ships have anchored here.	士倪合忖時多陟時 虾父 鶯哥列 啼
155 右	今日你在店等吓	You must stay at inn to-day.	天 孖時 時爹 壓 烟 都尼
155 左	你在此已行何事	What have you been doing here ?	挖 虾父 天 免 奴鷹 啼
〃	彼書在邊處印噉	Where was that book printed ?	噉 嘩時 嫩 吓 啤跌

「狩野本」が「喺」「在」を併用する事実は、一方で書面粵語を口語体使用で示す事例が進んで要るにも関わらず、一方では文言文体が書面上なお強固な拘束力を持っていたことを示している^{⑤⑥}。

【註】

① 曹志耘主編 (2008) 『漢語方言地図集・語法卷』商務印書館。

- ② 王力 (1937) 「中國文法中的繫詞」『清華學報』12 卷 1 期。小稿は『龍蟲並雕齋文集』第一冊, 中華書局, 1980 年刊, pp.252-314. に拠る。
- ③ 王力 (1937) 上掲書 pp.293-294.
- ④ 矢放昭文 (2016) 「英粵對音的聲調變讀與英語重音」『中國文化研究』第 32 号, pp.111-126.
- ⑤ 竹越美奈子・横田文彦 (2007) 「“啫”的歷史演變」『第十屆國際粵方言研討會論文集』張洪年・張雙慶・陳雄根主編, 中國社會科學出版社, pp.299-305.
- ⑥ なおこの情況は, 漢訳された『天路歷程土話』(正・続)では徹底的に改変されている。このことについては別稿での報告を準備中である。

4. 『英語集全』(1862 年)

次に『英語集全』(1862 年)が記す英文法知識の一端について述べて見たい。以下は, 複数を示す語末の「s」についての「時令」框郭外上欄の記述である:

「正英語, 凡有實字過于一數話尾, 必加一個 S 字, 其字音士, 譬如一年, 英語溫夜亞, 三年即地厘夜亞士, 一日溫低, 兩日即都低士, 一員銀溫打刺, 十員即噸打刺士, 如此即為正話, 廣東番話無此分別也」

(正しい英語では, 実字(名詞)で単数を越えるものの語尾には必ず S 字を加える。その字音は「士 /s⁶/」である。例えば「一年」は, 英語では「溫夜亞 /wan¹ ye⁶ a⁶/」, 「三年」は「地厘夜亞士 /dei³ lei⁴ ye⁶ a³ s⁶/」, 「一日」は「溫低 /wan¹ dai¹/」, 「兩日(二日)」は「都低士 /do¹ dai¹ s⁶/」, 「一員銀(一銀貨)」は「溫打刺 /wan¹ da² laa⁶/」, 「十員(十銀貨)」は「噸打刺士 /din¹ da² laa⁶ s⁶/」が正しい言い方である。「廣東番話」にはこの區別がない。)①

唐廷樞の記述によれば「廣東番話」は時に「廣東英語」とも記しており, Geoff P. Smith & Stephen Matthews (2005) などが指摘する所謂「ピジン英語」をさすものである。『英語集全』は「ピジン英語」とは異なる「正しい英語」として名詞語尾に付加する複数形 S の英語知識を注記しており, 正しい英語知識についての華人(中国人)によるごく初期の記述としてその価値は小さくない。また「士」(止攝三等)を多用している点については, 語頭子音 /s/ のみを利用していたのか, 或いは /s¹/ のように平口母音を伴っていたのか, については検討が必要である。但し「狩野本」「哈佛本」双方の『華英通語』では該当部分の対音字字体を小さくすることを通例としており②, 子音のみを意図していたと解釋することは可能かもしれない。

【註】

- ① 『英語集全』卷一, 頁十三, 「時令」框郭外上欄に記されている。
- ② /has/ : 虾時(頁 155), /was/ : 嘩時(頁 150), /ships/ : 陟時(頁 153), /have/ : 虾父(頁 153) などの例を挙げることが出来る。

5. 外来語

清代初期から中期に到る 16 世紀～19 世紀の間、ルイ十四世を代表とするブルボン王朝の経済支援もあり、イエズス会の宣教師は絶えることなく北京に派遣されている。マテオ・リッチ (1552-1610) やアダム・シャル (1592-1666), F・フェルビースト (1623-1688) など、先駆的活動を行った宣教師だけでなく、一般的にはあまり知られていない宣教師が陸続と派遣され、数理天文学、数学、測量技術、医学、解剖学、音楽等の西洋科学と芸術技術の導入が進んだことが報告されている^①。宣教師達をもたらした技術、思想に関してはフランス語等の西洋諸語から漢語文言文、西洋諸語から満洲語に訳されたものが漢語文言文へという流れが存在していた。F・フェルビーストは満洲語を習得し康熙帝に進講した、とも伝えられている。

だがオランダに続いてイギリス東印度会社がインドから東アジアにかけて活躍しはじめた 18 世紀以降、清朝側にもたらされた西方文物・西洋文化にも大きな変化が表れた。そのことは『狩野本』の収録する交易品名からも確かめることが出来る。

「鴉片」[舊公 (Patona: パトナ (インド) 郊外の阿片工場のあった地名に由来している)]^②が歴史の証人として登場する外、「加心 Curry 加俛合心、頁 124 左 (即ちカレー)」「噠 Tart、頁 113 右 (タルト)」「多時 Toast 多時特、頁 113 右 (トースト)」「布顛 Pudding、頁 113 右、(プディング)」、「些心 Sherry、頁 64 右、(シェリー酒)」「唛 Rum、頁 64 右 (ラム酒)」「罷蘭地 Brandy、頁 63 左 (ブランデー)」などの音訳語が外来語として漢語注の粵語に記録されており、このことも「廣東番話」「廣東英語」^③の誕生にもつながっていったと考えることができる。所謂「ピジン英語」の誕生であるが、一方では歐化語法の予兆を思わせる事象であったとも言えるのであろう。

【註】

- ① 杜赫徳編、鄭徳弟、呂一民、沈堅訳『耶蘇会士中国書簡集』(上・中・下)、上巻「中文版序」pp.001-018., 大象出版社, 2005 年刊。
 ② 「狩野本」56 帖左「通商貨類」(「哈佛本」78 帖左, 「耶魯本」81 帖左)

	漢語注	音注
“Opium”	「鴉片煙」	「啊卑唵」
“Patna”	「舊公」[即白公煙是也] /gau ⁶ gung ¹ / /zhik ⁶ gau ⁶ gung ¹ yin ¹ si ³ ya ⁵ /	「叭嗶」

ビハール州都“Patna”は 1764 年にイギリス東印度会社が領有した。19 世紀初頭に至り Patna 西郊外の Gulzaribagh Opium Factory で製造された阿片が阿片戦争 (1839-41) の直接原因になった、と伝えられているが「舊公」/gau⁶ gung¹/の語頭音節「舊」/gau⁶/は Gulzaribagh の語頭音を粵語音により対音表記している。同工場産の阿片が「舊公」という名称で流通していたことを物語っている。

- ③ 「廣東番話」「廣東英語」の呼称は『英語集全』に確認することが出来る。

6. 小結

最後に、『狩野本・華英通語』が英語音の /r/, /l/ を音訳する際に「𠵼, 𠵼, 𠵼, 𠵼, 𠵼, 𠵼, 𠵼, 𠵼, 𠵼, 𠵼」などを多用するだけでなく、「𠵼𠵼𠵼」「𠵼𠵼𠵼」「𠵼𠵼𠵼」など「二合音」型式にも多数の語音標記を依拠している事実について一言しておきたい。/l/ 音はともかく /r/ 音は粵語方言の音系には存在しない。そのため北京語音「兒」を借用したと考えられるが、字体がなぜこのように多いのか？なぜ「𠵼, 𠵼」などの俗字が作られたのか？今のところ明確な答えは求められない。おそらく時代を跨いで複数の交易現場において、英語音の漢語と異なる微妙な点がつよく認識され、記録されてきた結果が一資料に集積したが故に、このように字体が多くなった、と考えられる。

そのことは、例えば大英図書館所蔵の Or.10886, Or.7428, Or.7415 など書写本資料での /r/ 音標記の多様性を確認すると頷くことが出来る。これらの作字された /r/ 音標記は、中国の英語学習史上はじめて英語音の重要性を認識した証拠品として捉えることが可能である。英語音へのこだわり、重視は交易の現場でのコミュニケーションに欠かすことの出来ない強弱アクセントや粵語音にない /r/, /l/ 音の習得の必要性から生まれたものである。ラテン文字と異なり表音機能に制限のある漢字を使つての英語の音特徴表記の記録は「狩野本」『華英通語』の大きな語学的価値だと言うことが出来る。

語音重視は口語重視である。口語重視が書面粵語の発達と次の時代の白話運動の予兆になったことは否定出来ない。今日の外国語修得過程ではごく当たり前のことなのだが、「狩野本」の口語音、発音重視は次の時代の「歐化語法」現象発生へと静かに繋がっていったのである。

Manuscripts of Anglo-Cantonese transcriptions and a few sign of Europeanized grammar found in written Cantonese sentences

Akifumi YAHANASHI

Abstract

In this paper, the author has examined a few signs of pre-Europeanized grammatical features contained in manuscripts of Anglo-Cantonese transcriptions. These manuscripts were published around the mid-19th century, in the city of Canton. The author found an example of so-called “grammaticalization”, such as from the copula “係 hai⁶” to verb or preposition “喺 hai²” with the tone change shown in these manuscripts. It is possible for us to recognize this phenomenon is a sign of pre-Europeanized grammatical features.

After the Opium Wars (1840-41), through the remarkable development of Anglo-China trade, many words stem from English had been introduced to Cantonese colloquial speeches, fine ideas to realize the notations of English accents and pronunciation were also introduced by using Chinese characters originally limited to the descriptions of the sounds of Western languages. These careful transcriptions can be recognized in the ‘Kanou Version’ of the “Hua Ying Tong Yu” (1855).

The author suggests that these transcripts were created through the need for oral trade negotiations. The significance and necessity of aural negotiations fostered the creation of word lists and conversational phrase books, at the same time, the development of a written style for colloquial Cantonese. It is possible that these developments in written Cantonese can be recognized as influencing the Europeanized grammar for written Chinese that started from the second decade of the 20th century.

Keywords : Anglo-Cantonese transcriptions, Europeanized grammar, tone change, Written Cantonese, pre-Europeanized phenomenon

